



テニスの後で2トン

会員 若林 擴

土曜、日曜が天気なら、赤坂のホテルのテニスコート、テニスクラブのメンバーを薙ぎ倒すのが私の生きがい。

30年前、3ヵ月間、レッスンを受けて、大昔からテニスをやっていた意地悪いおばさんメンバーに混じって直ちに試合を始めた。「貴方は間違っここにお入りになったのよね!」と、まともに嫌みを言われ、ダブルスではなかなか組んで貰えず、「さーやろうか」と言ったのがけしからん。「十年早い!」、「やって頂けますか」だろうなんて言われながら、これに耐えた。今や、シニアメンバーで私の右に出る奴は居るか?この経験からビギナーには優しくする事にしている。

コートに立つと人格が変わる。人は車のハンドルを握ると人格が変わるらしいが、私はテニスのラケットを握ると人格が変わる。

だから、写真の通り、私のサンバイザーには角が生えている。

ウィークデイはミスタージキルである。

朝9時には必ず事務所に出て陣頭指揮をとり、5時まで一生懸命働く。

土、日はミスターハイドとなる。

バーベルで鍛えた背筋と、胸筋と、腕っ節で、サーブとスマッシュを、ボールが破裂するばかりに叩き込む。試合になると、ファーストサーブは自らのプライドの為に、セカンドサーブはダブルスのパートナーに捧げるように必ず入れ、ダブルフォルトを避ける。

リターンはドライブを掛けてベースラインぎりぎりに重いライジングボールを送るか、スライスを掛けたフォーハンドでスマッシュ。相手は大体これで息の根が止まる。

小業は得意とする所、相手がサウスポーなら、ラケットを左に深く引いて、素早くラケットの面で、左から右へ水平にボールの表面をこする。

すると、ボールに左回転が掛かり、急速に回転しながらネットを越え、相手の目の前にボトンと落ちる。相手はしめしめとラケットを振り、素早いリターンを図るとあに図らんや、ボールは落ちるや否や相手方の右側に略90度に曲がって跳ね、相手のラケットは空を切る。これを更に強く、下方に押し気味にして、一層左右に水平にこすると、ネットを越えて向こう側に落ちたボールは、鋭角に曲がって跳ね上がり、驚くなかれ、

再びネットを跨ぎブーメランのようにこちらのコートに戻ってくる。相手は余程の腕を持たない限り、慌てふためきこれについて行けない。手練の相手であると、冷静にこのボールの後ろからチョット触って送り込んで来る。ルールの上ではネットに触らない限りこの際のオーバーネットは認められるので、今度は帰って来たボールにこちらが慌てることになる。相手が右打ちであれば、右から左に強くこすって相手の目の前に落とすと、右回転が掛かり、相手の左側に略90度曲がって跳ね上がり、右手に持ったラケットはついて来られない。

カットマンとしてはドロップショットは得意中の得意、緩くて大きなバウンドで入れて来る相手のセカンドサーブはカモ。大きく垂直に振り下ろすラケット面がボールを垂直に強くこすり、リターンされたボールはネットを越えると急ブレーキが掛かり、ほぼネットすれすれに落ちた場所で急停止すると相手は拾う事も出来ない。

サーブは往年のマッケンローと同じ。時間を掛けてゆっくりと、大きなジェスチャーで相手を威嚇しながら、時速200キロに限りなく近い?サーブを入れる。相手のラケットはこれに触ることも出来ない時の醍醐味。

最近、身長2メートルにも及ぶベルリンフィルハーモニーオーケストラのホルン奏者とロシアの大統領プーチンのお供で来た相撲取りのようなロシア人と組ませた外国人の連合軍を、私とクラブメンバーの日本人の相棒とで迎え撃った。3メートルの高さから落ちてくる滝のような強烈なサーブに相棒はエースを取られて苦しみ、私が得意の時速200キロ級のサーブで舐めてかかってきた相手にお返しをしてやっとタイプレックまで持ち込んだが、何とかカムチャッカから来た相撲取りのように腹の出たロシア人が意外に器用で、ネット際で見事なボレーを見せ、夢中になってネット際に走り寄った私は右足に肉離れを起こし遂にタイプレックで破れた。高橋尚子は足に3ヵ所も肉離れをして良く走れたものだ。

テニスの後は2,000kgの重量を上げる。私はクレーンではないのでいっぺんに上げる訳ではない。レッグカール、バタフライ、ベンチプレス、ショルダープレス等のバーベルを数十回挙げるのを拾い集めて2トンになる。これが背筋、胸筋、上腕胸筋、手首を強化して時速200km級のサーブとなる。美人のインストラクターについて柔軟体操、それから水泳、そしてサウナで最後の汗を絞り出し、元のほっそりとした私に戻る。

さあこれで今晚は2キロは食えるかな?